

秋田県男鹿市五里合から産したヤベオオツノジカの化石

Fossil of *Sinomegaceros Yabei* from Iriai, Oga City, Akita Prefecture.

鈴木 照洋*・築地 洋*・五井 昭一**
Teruhiro Suzuki・Yoh Tsukiji・Shoichi Goi

キーワード：ヤベオオツノジカ 中節骨 秋田県 2例目
key words: *Sinomegaceros Yabei* middle phalanx Akita Prefecture 2nd case

1 はじめに

オオツノジカは第四紀中期更新世から前期完新世にかけて生息した代表的な大型哺乳類である。ヨーロッパ北部から東北アジアにかけて複数の属が分布し、日本ではヤベオオツノジカが生息していた。

ヤベオオツノジカの化石は日本国内の各地で発見が報告されているものの、本県では1970年に男鹿市脇本で発見された右中足骨の報告（Shikama・Takayasu,1971）以降、現在まで新たな報告はなされていない。

2024年9月、ヤベオオツノジカの化石が男鹿市五里合の安田海岸で発見された。これは秋田県にとって実に半世紀ぶり、2例目となるため、発見の希少性や重要性を鑑み報告を行うものである。

2 発見時の状況

化石は秋田県男鹿市に住む小学6年生の双子の兄弟、三浦悠光氏と三浦和悠氏によって発見された。発見者らは2024年9月、男鹿市五里合琴川の安田海岸にて、二人が通う小学校の授業で行われた「地層の観察会」に参加した（図1）。

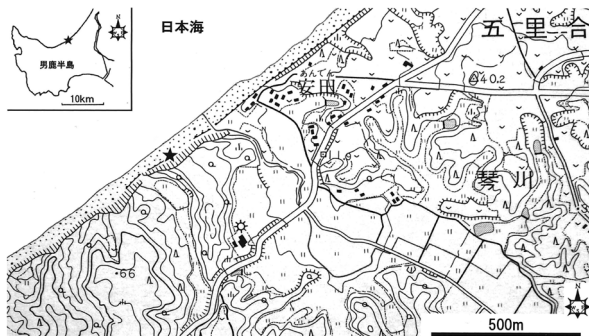


図1 化石産地の露頭所在地（★印）
国土地理院地図5万分の1「北浦」を使用した。

2024年9月29日、発見者は家族とともに会場を再訪した。海食洞が崩れて上部の崖から崩落した崖錐（39° 58′ 18.80″ N, 139° 50′ 50.64″ E）に上ったところ、潟西層安田砂部層（白石・竹内, 1999）の最上部付近に露頭から外れかけた状態で化石が露わになっているのを見つけた（図2）。骨化石の突き出ている層の高さは海岸波打ち際より5.5mである。

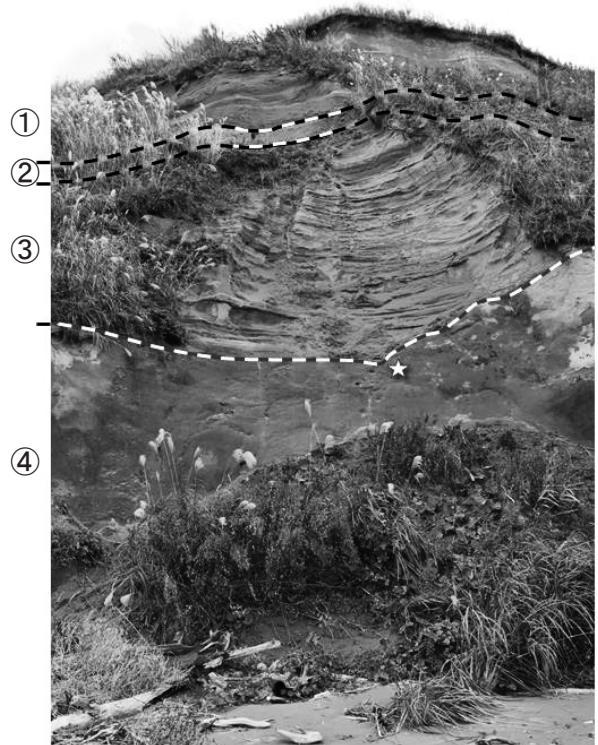


図2 化石が発見された安田海岸露頭
化石の採取地点は☆印。
①五里合層 ②阿蘇4 ③潟西層主部
④潟西層安田砂部層

*秋田県立博物館 **秋田県立博物館地質ボランティア

化石はやや摩耗しているものの、形状が明瞭で部位の特定が可能な状態であった（写真1～3）。



写真1～3 今回発見された化石

写真4～6 ヤベオオツノジカの化石
(国立科学博物館所蔵)

写真1～3および写真4～6は、いずれもそれぞれ同一縮尺で同一方向から撮影し、比較のために並べたものである（写真1・4は側面1、写真2・5は側面2、写真3・6は腹側（足底）面）。

3 同定の経緯

2024年10月3日、発見者から秋田県立博物館に化石が持ち込まれた。

同定に際しては、国立科学博物館の甲能直樹博士より、同館の所蔵するヤベオオツノジカの化石写真をご提供いただくとともに、ご助言いただいた。

その結果、骨のサイズおよび形状から判断し、ヤベオオツノジカの指骨のひとつである中節骨の可能性が高いことが判明した。

4 産出層準

産出した地層は第四紀更新世後期の沖浜堆積物である潟西層安田砂部層である。安田砂部層は安田海岸に分布する潟西層を構成し、貝化石を含む塊状無層理な砂層である。安田砂部層は現在の砂浜と同様の環境で形成した層であり、サンドパイプ（生痕化石）がやや多く、貝化石の濃集層を数枚挟む。

これまでこの層準からは多くの貝類化石の他、ホホジロザメの歯化石が上野・渡部（1984）により、また、スケトウダラの耳石化石が大江ほか（2022）により報告があるものの、陸上哺乳類化石の産出は無い。こうした観点からも、この発見は貴重なものとなる。

5 おわりに

今回の発見は、ヤベオオツノジカの秋田県での分布を改めて裏付け、補強する貴重な報告であるといえる。

また、発見者が地元在住の小学生であることも非常に意義深い。自然科学系分野の研究の担い手不足が深刻化し人材の育成が望まれる昨今、将来ある若き学習者の新発見は我々にとって一筋の光明である。

本県ではこれまで、こうした貴重な発見につながる地理的かつ教育的な環境が形成され、大切にされてきた。今後も、新たな研究や知見につながる環境を維持や整備、活用していくことが望ましいと考える。

謝辞

報告に当たっては三浦悠光、三浦和悠両氏から化石を寄贈していただくとともに、保護者のご協力を仰ぎながら採取時の情報を提供いただきました。また、本化石の同定に際しては、国立科学博物館の甲能直樹博士ならびに木村由莉博士に快くご協力、ご助言いただきました。ここに深く感謝申し上げます。

引用文献

- Shikama,T and Takayasu,T. (1971) Fossil Mammals from the Shibikawa Formation in Oga Peninsula, Akita Prefecture Science Reports of the Yokohama National University. Sec, II, No.18,
- 上野輝彌・渡部晟(1984), 秋田県立博物館所蔵ホホジロザメ属の歯化石, 秋田県立博物館研究報告第9号.p.71-80.秋田県立博物館
- 白井正明・多田隆司・藤岡換太郎(1997), ODP日本海試料との対比に基づく男鹿半島安田海岸更新世中-後期テフラの同定と年代, 第四紀研究. 36(3).p.183-196. 第四紀研究学会
- 白石建雄・竹内貞子(1999), 秋田県男鹿半島における上部更新統層序の再検討, 第四期研究. 38(1).p.29-39. 第四期研究学会
- 大江文雄・渡部晟・渡部均(2022), 秋田県男鹿半島安田の後期更新世潟西層から得られたスケトウダラの耳石, 秋田県立博物館研究報告第47号. P.1-7. 秋田県立博物館